

新編水滸畫傳

四編

三



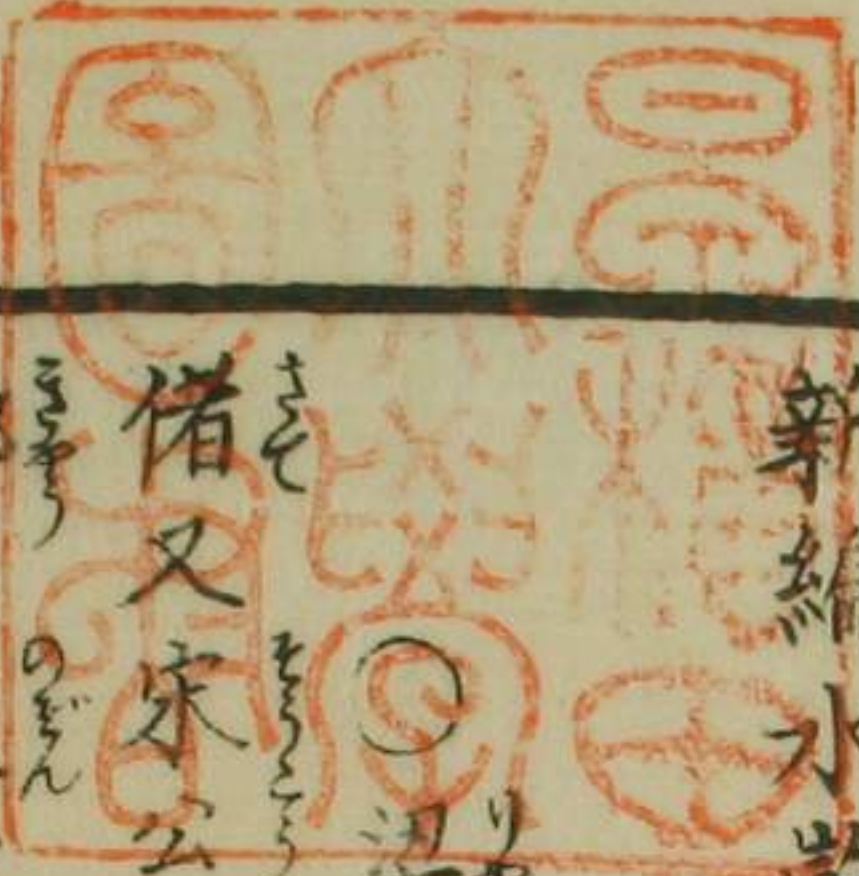
門 遠 21
號 8755
卷 333

新編水滸画傳卷之三十三

東武 高井蘭山翁

譯編

明治三十二年
十月十日 購求



○梁山泊小吳用戴宗を奉
備又宋公明ハ父太公死去の訃音を以て不意小燕順石勇小別れ故
郷を望で連夜小馳回り一程日を累ねく故郷の村口小馳着り。
此所小張社長と云者が酒店ふるくまけ此小憩一々張社長ハ原来
宋江と知音あるが。宋江一向両眼小涙を含悦びざる色ありなれば乃ち
向て云押司ハ己小一年半の餘客路小在る故郷小回りぬるり今般
再び回りぬる大悦のあり然る何ゆゑ押司顔を煩惱し悦び
ぬるや。宋江答る足下ハ未ど知りぬる事。我が一人の老父己小死去
とて依て旅先へ訃音到来し。連夜小馳回る次第とあて心神此

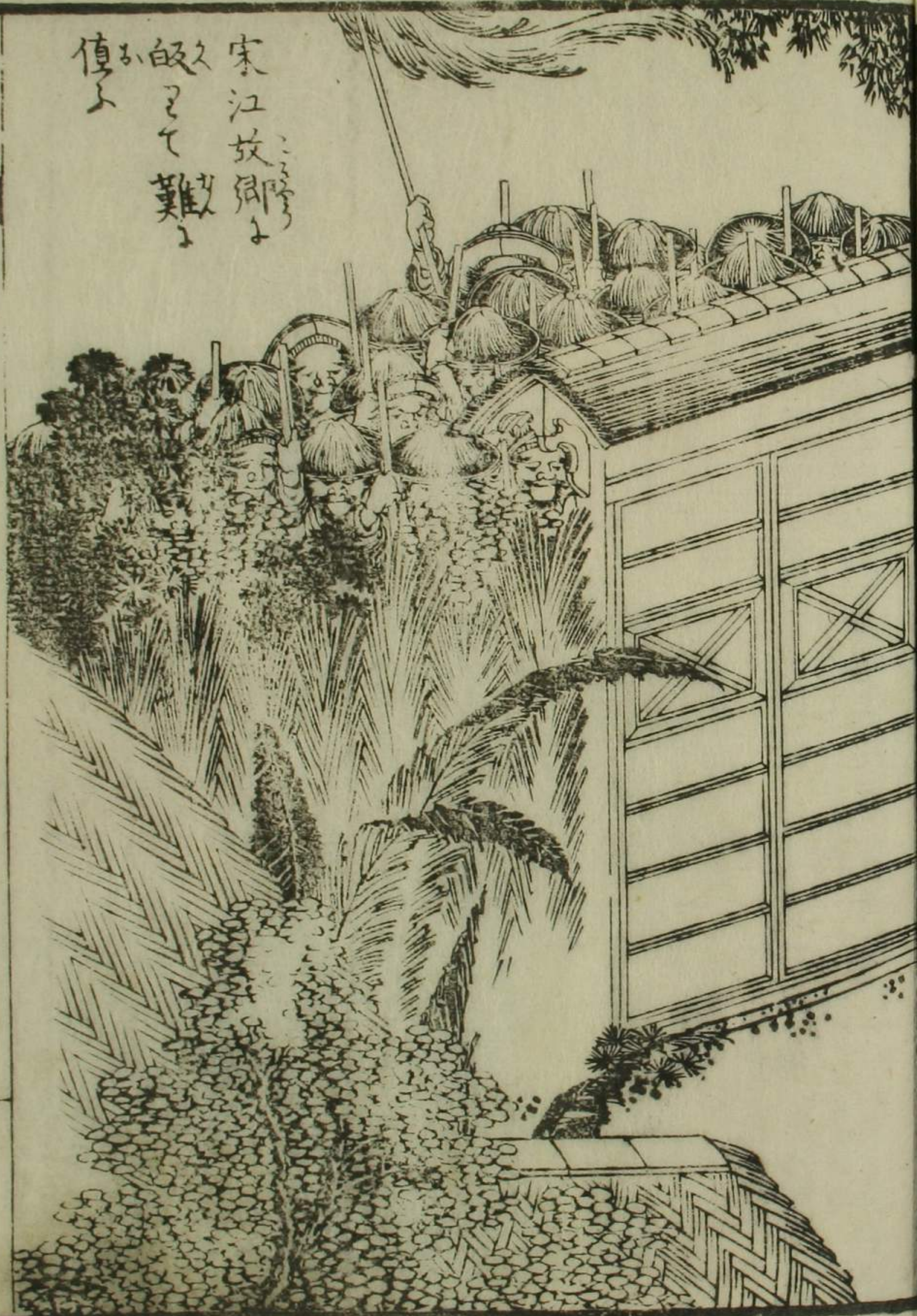
惱勞少く、張社長是を大に笑て云、押司ハ何を戯れてかくの
事、此事を言ふや。父宋太公先刻我店来り酒を酌で廻りぬ。
いんぞ其後頓死しぬ。宋江が云、足下我を誰とあててあるも、我弟
宋清が方あり。書簡を寄せて、老父の死去を告越さる。依て、廻り
来て、義理を缺とあれ。父の喪中を易ごとく、萬障を捨て、飯をせし
足下り、疑ひあり。是をえぬとて、宋清が書簡を出し、足せられ、張
社長大に笑て云、いんぞ是らのとあらんや。父宋太公ハ今日午の刻の
前後東村の王太公と共に、我店来り酒を酌め、ひめりて、彰けし。
宋江これと心中甚ど疑ひ、日も漸く晚く、頓て張社長別を
直ち家小廻り、己小門内入る。窺ひ、何の動静もあらず。しる
と、家僕ホ宋江をえ、尽く皆拜せ、悦びぬ。宋江先問く

いそぐ我が父太公并小弟宋清何も恙あらず。家僕答て云、太公毎日
押司のすの、渴想し、あひぬ。今日帰り、あひしと、誠小家の福也。
太公ハ、東村の王太公と共に、張社長が店に於て、酒を酌め、廻り
あつり。房間の内、敷く、睡入居あつ。小刻對面なり。宋江これを
見て、大に驚き、還小草堂の内、進み入る。宋清悦び、迎へて拜を
あし。宋江此時、宋清が素服を着せ、うろくを見え。いよく、其偽を
知、宋清を罵り、なま。汝忤逆の徒、老父恙あらず。在まをに。いんぞ死
あつと、詐く書簡を寄せ、己小我を自殺あて、いんと、いんぞ死
る。莫大の愆。汝直ち此のどく、不孝を行つ。未と云、終ら
ざる。屏風の背後より、宋太公走り出、呼り云、いんぞ。宋江誤る
宋清を罵ると、あれ。是原宋清、う愆あつ。我毎日汝がすの、

憂へ慮り再び對面せんを欲し乃ち宋清に命せ我已死
と。書簡を修へしめ一日も汝が早く回らんを圖り形は移ひ
我又人の云を笑ふ。白虎山の辺に多く強賊あり。汝をも擧擧
司ト。強盜の頭領をあるしめ。共不忠不義の者の移りなり。
此の多ふ別く汝を呼回さんと。彼宋大官人の方より来りし石勇と
云者。書簡を寄る。汝を殺しは是都く我が仇なり。と。に
宋清が預りしとあるは。必を誤て宋清を怒るとある。宋江を
實地上に拜伏し。云々。大人形のごとく逆子を憐れみと誠感
佩骨髄に徹せり。先き躰恙あるをえたり。何の悦うこれか。んや。
唯ち。某が閻婆惜を殺し。官司猶これを捨てし。某を
殺し。求めぬ。太公が云。宋清が未ど回らざりし時よりも。多く朱全雷

横兩都頭の力を以て。官司のつらハ漸く鬆あり。今時分ハ汝を尋ん者
一人も。殊更項日朝廷に皇太子を立む。故天下の罪人を御赦
免あ。風聞を。是の因に。汝を賺し。急を回し。ぬ。必を誤て怒を
起し。宋江又問。云。朱全雷横兩都頭ハ曾く我家に往来は
し。宋清が云。我前日人の沙汰し。を。宋江。兩都頭各公用ハ
因。他州。朱全。東京。死。雷横。何もの
処。往。未。今。縣。只。兩。新。頭。の
此。兩。人。共。姓。ハ。趙。中。公。事。を。振。宋。太。公。又。云。宋。江。汝。遠
路。を。来。り。嚙。痕。あ。先。軍。一。く。房。間。の。内。入。り。休。息。せ。宋。江。父。の
命。を。受。遂。小。房。間。の。内。入。り。歌。と。り。此。時。一。更。の。時。分。家。人。ホ。小
尽。く。歇。と。る。処。火。把。の。光。り。四。下。小。明。亮。大。勢。の。人。馬。宋。太。公。が

宋江故郷
久々に
復る
難し



新編水滸畫傳卷之三十三

四



新編水滸畫傳卷之三十三

三

館を取圍とりこむ一齊いつせい咄うたと喊こゑき叫こゑんで云い々々ハ必かならずず宋江そうけいを走はしらり
むさそあるれと各おのづから頻しきりおどろくおどろ宋江そうけい父子ふし三人さんにん此こゝ光景ひかりげいをみて大おほ小こ
驚おどろき互たがひに面おもてをみ合あはら果はるる斗たたかりし凡およそ凡およそ百ひゃく有あるる人馬ひとばといは
大将たいしやうハ鄆城おんじやう縣けんの新都頭しんとう兄弟けいだいを趙能てうねい趙得てうとくと云い者もの之の大音たいおんハ呼よび
宋太公そうたこうハ上うへの法度ほつたふを知らしらば耳みみ一いっ速すみ小せう見けん子し宋江そうけいをしらば我われが家け
与よハよ然しからば我われ肯けんて汝なんぢを傷やめとあらじ若し又また彼かれを隠しかくしん汝なんぢら
父子ふし三人さんにん捕とらまへるる宋太公そうたこう云い宋江そうけいハ未いまだ家けをかへらず
何なにゆゑ宋江そうけいをしらば趙能てうねい呵あとと打笑うちわらひひ云い汝なんぢ必かならずも偽いつはりを構へ
我われを誑くまどふまどふまど己おのれハ一箇いっかんのひと人ひとらし宋江そうけい嚮きやうハ張社長ちやうじやうが店みせを酒で
飲のむを見けん届とどけし尚なほ且また汝なんぢが家けをかへらず跟ついて込こめしんぞこれを抵頼たのみしや只ただ速すみ
宋江そうけいをしらば汝なんぢが禍わざはひを免れし此この時とき宋江そうけい拊子ふしの上うへにあらわてし合居あひあ居い一いっが
父宋太公ちやうたこう小對せうたいして云い々々ハ大人おとな彼かれらと爭論せうろんししとあられ我われ先まづ自みづからしめ
彼かれら不捉とらへず縣けん裡の役人やくにん其その原もと來きた我われと親おやしられば縱ゆるひ官司のましらり
我われを助んと欲めば多おほくん殊ことに朝あすみに天下の罪人を沙し赦し免め
わんとあらば必かならず定さだむ時遭あひて罪を免めふし彼かれ新あら都頭のハ僥あたり依よて
今いま此こゝ都頭の職しやくをかへらぬも己おのれが尊びに傲おごり必ず我を捉へんと欲す
今いま徒たらず彼かれと爭論せうろんすも益えきあらずとあらじ自らかく搦とあり
明日あした官司の於から罪を免れば却かへり兩都頭が膾えん膾えんの氣を請ましらり
大人おとな明あらずこれを察さつしし宋太公そうたこう忽たちち泪を泣き然らず云い々々ハ我われ汝なんぢを呼
回かへり難を受うけしと今更さら後悔くわいごうしと一向いっけう哭なき悲ししらり
宋江そうけい云い大人おとな必かならずも憂うれへしとあられ我われ明日あした官司のましらり却かへり幸ひ
とあらじ某それ向むかふ旅中の人を殺ころし火を放つの豪傑がうけつらと交あひを

結び。その山陣へ入て身を懸さんと図り。若きもあつた。再び大人に
 見えんと難うらん。今幸ひ又官司おゆる。何国に流さうとあつた。其
 限の満るまで待た。再びあつた。重く大人おまをえんと却て易
 うらん。然らば我宋清と共ふ日夜大人の左右に侍る。一点の孝を尽し
 聊以て大恩を謝し。宋太公云。汝已此のどく主意を定め。バ
 としめ。汝も存存に任ま。汝明日官司おゆる。我多く金銀を以て
 諸役人へ送り。宜しく汝を頼む。然るを決断を頼む。必し心を
 悩むとあつた。宋江頓首して。是を謝し。乃ち梯子の上へ登て。声は呼
 ぶ。云々。汝ら先噪動も。とあつた。我罪は。と死な。あつた。必し
 御救免とあつた。ともあつた。先兩人の都頭寒舎へ入。三盃を酌め。へ
 明日我都頭へ後。官司へ赴くべ。趙能云。汝計を。我ら兄弟を

家内へ賺し入。暗に我らと図らんと思ふ。我何ぞ白くと汝が計の中
 らんや。汝後ら。不益益の心を費ま。とあつた。宋江云。我何ぞあつた。老父
 舎弟。不福を蒙ら。む。とあつた。早く疑ひを休。家内へ入。我
 恭しく三盃を勧め。急な梯子を下り。自ら大門を推開。則ち兩人の
 都頭を引。堂上へ。坐。已。定。り。傾。く。酒。宴。を。設。け。珍。物。教。を
 尽。し。兩。人。の。都。頭。并。し。百。人。餘。の。兵。共。を。懇。不。款。待。し。尚。錢。財。を。分。諸。の。兵
 共。に。施。し。又。二十兩の白銀を以て。兩。人。の。都。頭。へ。送。り。再。三。酒。を。勸。め。夜。已。不
 更。し。兩。人。の。都。頭。を。夜。に。宋。太。公。が。館。へ。歇。し。翌。日。五。更。の。時。分。兩。人。の
 都。頭。遂。し。宋。江。を。引。て。縣。裡。へ。馳。せ。夜。已。不。明。あ。ん。と。せ。し。時。ち。也。到。着
 し。知。縣。へ。や。ぐ。廳。上。へ。呼。び。出。し。兩。人。の。都。頭。趙。能。趙。得。遂。し。宋。江。を。引。て
 廳。前。へ。呼。び。出。し。知。縣。時。聞。抄。を。見。て。早。速。宋。江。へ。白。状。を。書。し。り

宋江乃以手寫白狀を書き云前年秋七月より。閻婆
 惜と妾と一々外宅に養ひ置きた。此婆惜不賢不礼なるに依り。
 不圖争を假乃ち酒真の衆に。想ひてこれを殺害し。久しく罪を避け。
 故に逃生した。這般兩都頭趙能趙得小捉もぬ。従ひ何等の罪
 過に犯りし。少くも怒りて。写し知縣に呈し。知縣是を
 見。先宋江を牢中に。満縣の吏賤もくく宋江が捉れしを
 嘆く大に憐れ。措の役人共都く宋江が徳を知縣に告。免されんこと。成
 求り云々。宋江も己を。閻婆惜を殺せしこと明ら。え。
 殊に閻婆惜公事の相ふ。若もあ。相公宜しく
 憐れを垂る。宋江が罪を免し。知縣此言を。大に悦び。同トく
 宋江を免さんと欲し。先宋江が頭枷を除く。牢中に入置り。宋太

公多く金銀を上下の役人に送て。宋江を救えんと圖り。役人ども皆
 悉く其意を。各心を用ひ。閻老婆死し。半年餘及び
 彼張三又再び。直ち六十日の限り満と待。知縣文書を修
 者一人あり。直ち六十日の限り満と待。知縣文書を修
 則ち宋江を濟州府に送て。決断を求。知府文書を看て。宋江が
 罪を正し。只二十杖策ち。面刺を加へ。兩入の下官を監押し。
 宋江を江州に流し。役人共宋太公が賄賂を請。の。す。
 宋江とも原来交り厚り。殊更懇情を垂。頭枷も別。ん
 輕きを用ひ。兩入の下官張千李万。遂に宋江を監押し。
 州衙の前。宋江が父宋太公弟宋清と共。此辺に
 相迎へ。多く酒食を設け。宋江并に兩入の下官を請て。食せ

しめ。又若干の白銀を出し張千李万与へ又新しき衣服を以て宋江の着せしめ。旅粧己に調りし。宋太公自ら宋江を引て僻静なる処に留り乃ち命じて云々。我聞江州ハ是富饒なる地也。魚米多き所也。是に依て我這回金銀を緒役人に送る。汝を彼所へ送らば汝宜しく心を寛げ自ら重く保養せよ。我頃て宋清を死す。汝を訪まし。若好便ある毎度書簡を寄て我を安せしめ。汝今江州へ移らば必ず梁山泊の下を過る。若梁山泊の豪傑ら汝を奪り山陣に留るも必ず彼らと一所に在る。強盗の頭領を做しあるれ。此一言ハ第一肝要の事ある。牢く心に記して忘るべし。汝若配所へ趣きかば只宜しく時の勢を待べし。上天り憐れ無あり。何条も父子再會の期ありんや。必ず自ら焦燥を

心を悩し。且病を作しあるれ。宋江父が教訓を以て感懐肝銘に覺は涙を洒ぎ深く哭き。遂に父宋太公に別れ。江州を望て進發を舍弟宋清ハ猶一程の路を送りし。宋江別に臨んで再三宋清に命じて云。汝必ず我が事を以て憂へ。唯よく老父に事へ孝を盡し。我想此事を惹出し。救度老父を恵りし。汝も孝道を守りて誠を以て我が一生の憂へ。汝の如く我に替り。朝夕老父の左右に侍り。何事も老父の心を後と。晩年の餘命を娛しめ。汝を我を訪んとく。遠く江州の配所へ送らるる。若老父汝を撤られし。我は誰か。誰か肯て老父に事する者ありん。り。又父の命を配所へ訪らし。我を助るとも。若又多し。水も汝が憂へ預らば。知人多る。我を助るとも。若又多し。水も汝が憂へ預らば。

若天我を棄るゝん。改日必むゆづりて父子兄弟重く遇ん。
 尺宜しく時のゆるを待て。再會の期を測ふ。是則必要の事。
 宋清益涙を流し。遂に宋江の別宅へぞ飯りたり。扱宋江ハ
 兩人の下官と知りし旅路に向ふ処。あ人の下官張千李万宋江ハ
 父宋太公より多く錢財を恵れ心中悦ぶ。限り限なし。況や宋江ハ
 忠義の士ありとぞ知れ。路まがら慇懃に宋江を敬ひ。いさゝか疎
 略の事あり。一日三人旅宿を求めて歇し。宋江先兩人の下官に對
 して云る。我が軍明日梁山泊の下をるべき。若山陣の豪傑ら
 我が名をききし。あらば必む山を下つて我を奪取。汝あ人を驚しむ。こ
 ろあぶられ。我が軍明日ハ常あり。もあく打立小路を求めて馳せ。あ
 汝ら兩人軍一く此儀も同ト多。あ人の下官がとぞ。押司り。自ら
 是

ホの事と語りあらん。某ら必定梁山泊の麓をこて禍を受へ。是れ
 押司を告知せし。莫大の福。明日ハ尤早天より打出小路を求て
 馳せ。然らば梁山泊の禍を免れんと。已に昨夜を定め。翌日五更に
 一點不起。飯を食。三人旅宿を立出。小路を移。二三十里許。処ハ
 山坡の背後より。一彪の兵馳出。宋江をぞ。内の大將ハ乃ち赤
 髮鬼劉唐。劉唐四五十人の小賊を引。馳來り。彼兩人の下官を殺さん
 と。これ張千李万大に驚き。忽ち色土のごとく。半ハ死人と
 等し。宋江劉唐を問。賢弟ハ誰を殺さんとせ。劉唐云。此
 兩人の下官を殺さんと欲。宋江云。汝若果しく兩人の下官を殺さんと
 か。我肯て自己おこれ殺さん。吾刀を我お与へ。汝自ら彼を殺して
 身を汚え。劉唐云。我これを殺さば。長兄あをを下。して殺さハ

却て無礼なりとの一言。敢て命を背け刀をもち間宜しく二人の
 下官を害し棄めんとす。遂に刀を宋江に与へし。宋江刀を奪ひ又劉唐に
 問く云々。汝今二人の下官を殺さんと欲する意ハ何ん。劉唐答て曰く
 山陣の主晁天王の命を因り多くの人を鄆城縣に弛く。長兄の命を
 伺ひめり。処に長兄又官司に捉まると。牢中に居ぬを安んず。晁
 天王已に計を以て急に長兄を救ひせんと計り。諸人凡て風説
 する。長兄此度諸役人の憐れを受め。牢中殊に寛鬆あり。苦
 しむ蒙り。終に死罪を免れ。流罪に決断せし。淫言を語り
 し。且つを延く動静を伺ひ。処に果して此回江州に流されぬ。一
 中。晁天王の頭領を四方に分け。長兄を迎へし。某が
 某が長兄を接へし。尤も是を依べり。某今長兄を請て山陣に

上らん。彼友人を活し置く。何の益ありん。是故に是を殺さんと欲す。
 宋江が云賢才。亦已に此の如らん。志尤切こと。却て我を救ふ
 ことをあし。我を不忠不義の地に落し。似たり。若し我を迎く山
 陣に上らん。則ち我性命を害せんとす。等し。我此処を
 自殺を遂。猶清名を末代に遺さば。家門の譽。此より。已に刀を
 當自殺せん。と。処に劉唐是を奪ひ。慌て忙し推住。頓て刀を奪
 ひ。云々。長兄果し。心を決し。あし。別。又宜し。商賤に
 有る。不必も。驕る。驕を傷ひ。宋江が云賢才。信實に
 我を憐む。心あり。這次に我を放く。江州に往し。此後配所の
 日限満。再び回す。あし。先山陣に。足下と會合す。間
 賢弟。明らか。を察せし。劉唐が云某ハ晁天王の命を受て。亦し。

新編大正書信卷之三十三



宋江
劉唐と
宥め
兩人の下
官
獲

赤馬頭



檀小主意をあると能く幸ひ今大路の上小軍師吳学究花知寨
 共小同くゆく長兄のふりあを待居され。長兄先速小彼兩人を此処小呼
 寄く宜しく商議を遂めへ宋江云已ふかあふ快く此處人を清く商
 議をせんて則一人の小賊を馳し吳用花榮唐を並べ跑来り。
 頃く宋江が前小馳り馬を下り恭しく礼を叙畢りし処小花榮
 先云々ハハハを宋長兄の頸枷を除くせんや我あこれを除んと
 已ふ左右を顧みく小賊らふれと命せんせふ宋江慌く云々ハ花
 賢亦何ゆゑかこのとき言とのめや此頸枷ハ是國家の法度ゆく
 私のもふゆゆハハハを擅ふ是を除んや必む卒示のてを平しあふ
 清風寨ゆく劉高が説し囚車とハ一列ありは吳用此言とゆき大ハ
 咲く云々ハ某已ふ長兄の意を察せり。從ひ頸枷を除るハ長兄を

ふ山陣小苗どんハ何の妨うあらん且晁天王久しく長兄小見えざる故
 朝夕長兄のよとのも渴想を願くハ長兄片時山陣小上る心腹のこと
 とも語り多へ宋江云唯吳先生ハよく我が意を知りあひぬるも願
 安心を彼兩人の下官ハ官司の命を奉て我を監押はるハ殊更我を
 敵の心深し。從ひ我が命を果せとも彼兩人が命ハ扶んと思へり。
 願くも吳先生我が命を彼兩人を饒し多。此時兩人の下官心中ハ
 宋江が此一言を悦び只願宋江小向く良吉多ハ某も兩人が命ハ
 全く宋押司の扶と蒙るのも憐れと無れ救ひあふ。吳用是を笑
 打笑ひ。頃く宋江を導く。漫くと芦葦の茂る岸辺小ありしハ
 小や救艘の船来り相迎へ乃ち諸の人を載く山前小漕つけ。此処
 より又岸小上り直ち小断金亭の上小至り。吳用已ふ小賊らと四下小

馳く諸の頭領ふ斯と告ぐれば衆皆斬金亭小御と宋江を迎へ
 直ち不衆義廳小導と各相見し處に晁蓋先宋江に對して
 云々ハ我輩鄆城縣に於て押司小一命を扶られてより晁日と
 神司の大恩を想をばしつとをわ。向々又諸の豪傑を山
 陣に薦めをばされ。亦當陣の光を増めると大に彼此此洪恩
 何を以てうこそを報せんや。城小只心な銘骨小鏤のこ宋江が云
 某向小閣婆惜を殺してより。故口を走り出凡半年餘り異々小
 流落して再び又禍を被りし故山陣小來く身を躲さんと已に
 花榮秦明ホと殘定しく山陣小赴んとし處小洋途小於て不圖
 石勇小遇ひ則亦宋清が書簡を接し。こを披見し。老父
 死去し未ど葬に。某が回と待つとの計書を以て一刻も子く

回るべしと云々。中途中途あり馳り。父が死去と云ハ都て偽を
 某善措の豪傑小隨く山陣小足を留し。やあんと老父偏小を
 怕れ。このぞく詐の書簡を修へ我を故の小呼甲ぬ然る又官司へ
 捉り。我十日在牢し。諸役人。都々某とハ原来交り睦し。故
 衆皆憐と垂情深く。在牢の内。少も苦を情を。今又江州小
 流。とと。此處ハ原富饒なる土地也。他の配所とハ大に同し。先
 先互小一命恙なく相見し。何の喜びうこれ。あんと。某は暫く
 山陣小在り。別離の患とも。語り慰んと想へども。配所への日限定め
 あつて已に逼りし。久く苗が。則是より辞別。晁蓋が云
 何ぞか甚ど急ぎめ。先暫く坐し。乃ち晁蓋宋江同く中
 央に坐し。二人の下官ハ宋江が椅子の背後に跪き。晁蓋緒の豪

傑と呼で左右小坐せり。各宋江に對し一礼畢。此は晁蓋願て蓋を
把り宋江に勸め酒已み救遍巡りたる處宋江慇懃に謝して云々。蓋を
取て宋江に勸め酒已み救遍巡りたる處宋江慇懃に謝して云々。蓋を
諸豪傑我を愛し志深きと感佩し勝たり。其は是罪を犯し
流人され不く住す軍に領へ速に山を下りやせん。蓋を收め
るんや。晁蓋が云押司何故か我山陣を見外にハるめや。願へ先山陣に
比り之押司より兩入の下官を殺す不忌びあるん。我多く金銀を彼より
与へ回しめ。則彼官司へハ梁山泊の豪傑大勢山を下り。押司を奪ひ
取ぬと云ふ。然らば罪彼より身及ぶ。唯軍に意を決し。宋江が
云長兄必ぞ是ホの事と云ふ。是則我を救ひめ。我はあはれに
却て我を苦しめ。我は家ハ尚一人の老父あり。某が禍を

蒙り異字不徘徊し。如く。老父の左右小侍。孝を尽して能はず。
是を憂へて万千なり。今我を山陣に留らば父が教訓を背くの事
わら。禍必定。老父が身及ぶ。我這遭故口を出し。時老父再三此の
の事を叮嚀せり。我の心を安んず。これを背んや。向かい我の心。老父が心を
知り。一時の興に乗じ。山陣に如き。んと欲し。然れど。這
次ハ父が教訓を受く配所。趣く。前遭とハ等しく。此
我の長兄の陳を随ふ。山陣に留らば。上天理を。下ハ父教に
違ふ者なり。不忠不孝の徒。人若わ。人ハ。従ひ。榮花ハ
しく百年の壽を保つ。畢竟何の益あり。長兄の心。我を饒し
らるん。今茲一死を。忽ち地上に拜伏し。深く涙を
洒ぎ。晁蓋。呉用。公孫勝。一齊に宋江を扶起し。去り。

長兄決して山陣に留り居るに其ら豈敢て苦小苗を奪ふらんや。必む憂ひありけり。然るに今宵の心を寛げ山陣に宿し。明日早く山を下らせしとて再三再四留て。又大に飲酌を催ぬ。宋江の今止しとせむ。一日の酒を酌良興を興し。下官と共に一処に在る。翌早天の起る。山を下らんと別を告ぐ。兵用が云某一人の知己。今幸に兩院押牢節級とあり。江州に居住し乃ち姓の戴名宗と号す。人皆彼を稱して戴院長と中。彼又道術を善く。一日の中八百里の道を行わり。人皆彼を稱して神行大保とも譚名せり。此人原来財を輕んと美を重んと。一人の大丈夫。某昨夜一封の書簡を修て此あり。今押司にこれを渡さん。江州にあり。早速これと戴宗に届けし。彼も

宜しく交りを結びぬ。後トて何等の有りとも速に我が輩に告知せぬ。必む隔心を置く。宋江を聞く感謝に堪は深く礼し。此時晁蓋諸の頭領迄深く宋江が別を忍び。頼み酒宴を設け宋江を款待又餞として一盤の金銀を宋江に送り。別二十兩の銀を。下官ふ与へ酒宴も罷り。諸頭領皆尽く宋江を送り。山を下り。各別を惜み。兵用と花榮と共宋江を送り。二十里外に大路あり。頼り依り恋一別不及び。相宋江を梁山泊を去る。兩人の下官と共に江州へと趣き。此人の下官は梁山泊に馬多きを。見し心中驚き。猶且諸の頭領専ら宋江を敬みをえ。是又奇異の思ひをなす。殊に山陣に於て二十兩の銀を好く。天に歡び地を悦び。こゝに宋江を敬ひる。とて

行遍大并書傳卷之三十三

○揭陽嶺ゆく宋江李俊の遇

宋江配所への道を馳せり。半月餘ありしが。一つの嶺あり。此嶺に
 入りぬ。お人の下官宋江が對して此嶺を這れば。則得陽江と云ふ。此あり
 江州に到るハ怒る水路や。其間遠く。宋江が云。今天色大熱して
 日中ハ殊更勝ぐ。此朝涼の衆して。嶺を這る可や。お人の下官の
 云。押司の言極る然り。速に今早涼の嶺を這るべし。三人同トく峰の
 馳上り。方ハ半日なり。往く嶺頭を這り。処ハ此辺ハ一軒の酒店あり。
 前ハ惟樹ハ眺。後ろハ巖崖ハ靠。左右ハ都々草屋あり。被樹陰ハ
 下ハ一ツの帘あり。宋江を足々心中ハ悦び。乃お人の下官ハ對
 して云。我輩己ハ飢渴ハ及ぐ。疲れ。此嶺上酒肆。幸ひ。且酒食を求め。是を用ひ。益精神を補ひ。嶺を下らん。と云。

三人等一酒店ハ入。坐を布。良久。待たれ。更ハ一個の人も出
 ず。宋江の云。此店ハ何や。一人の男女も。内ハ一人の大漢子。出
 内ハ一人。速ハ。未ト云。罷ら。内ハ一人。大漢子。出
 ける。色赤く。鬚乱。眼圓く。口方。此漢子。即宋江三人を。見
 恭く。問。貴客ハ。幾。酒を。索。宋江。云。我輩。速
 路を。馳。頗。飢。疲。先。宜。肉を。求。これ。を。食。せん。に。
 汝。肉。を持。我。賣。彼。漢子。云。我。店。中。只。牛肉。と。白酒。を。
 賣。入。是。酒。を用。ひ。宋江。云。是。尤。先。二。斤。の。肉。と。
 一。角。の。酒。を。合。手。彼。漢子。云。貴客。我。の。怪。之。何。に。
 我。此。嶺。上。酒。を。賣。先。價。を。後。酒。を。量。の。例。あり。
 願。く。は。貴客。先。酒。錢。を。償。ひ。然。ら。早。速。酒。を。量。り。知。べ。し。

宋江が先小價を償う後酒を酌り同トト然らば先酒錢を償んとて急小包袱蓋を開く銀を取出しこれ彼漢子傍小立ち暗小包の内小物あつをえ先虚華地これと悦びり。宋江遂小銀を引く被漢子小言へし彼漢子大悦でこれを收め傾く一桶の酒と一盤の肉とを携へて宋江が前小置自く大盃小こまを醸く宋江ホ三人小勸めし処小宋江ホを飲で云く。當世界平くあり。諸方小悪人多く縦横し動不動酒の内小蒜汗菜を入り萬千此豪傑を殺し財宝を奪ひ取と云く。必汰も然れ我輩ハ全く是を信ぜ故不到。彼漢子打咲く云く。貴客の言尤當り。今定め異り。彼漢子打咲く云く。貴客の言尤當り。今時ハ道中多く悪人多く麻菜を酒の内小和し。もく旅人を害し。

財宝を劫ひ取く。我が此酒の内小麻菜を入り。貴客卒尔小こまを用ひし。宋江も同く咲て云。汝今我が云く。戯れ言を笑く。汝も又戯れを云。速莫我何ぞ麻菜を怕んや。我及て毒の試。是を飲んと思。又一笑を催し。此時友人の下官が云く。白酒ハ原盪く飲とれ。味ハ美あり。押司宜しく盪く飲。或んや宋江云。是減小味ハ美。汝早く盪く来れ。彼漢子小命トこれハ彼漢子心中暗小悦び。想道凡蒜汗菜ハ盪く。酒の内小用と。此ハ甚し。彼輩今酒を盪。云ハ。是我小福を与へ。己が死を急んとす。今麻菜を用ひ。更何の時を待ん。傾く麻菜を把く。酒の内小入。遂小熱く盪く。再び宋江ホ三人が前小持。宋江ホ三人ハ。今麻菜を加へ。夢中もあ。又大盃小満くと。醜。



宋江
李俊
會



一連の三盃を酌乾く。先主人の下官忽ち涎を流して地上に倒れ、更の身をも動はしと叶いざりし。宋江これを見、急に扶け起さんと云く。汝主人僅の酒を飲で何ぞもかく大醉せや。のまご云く了らぬ。宋江も驚く。忽然と眼を眩し、地上に撲倒。三人只面を觀合せ。さう動くと能はざりしを彼大漢子歎息し。云く。嗚呼辱けり。項ハ曾く得米の事あざりしに。今日天より此三人を我々家にゆせしめや。是も其莫大の吉兆あり。速に此輩を殺し。喜ば酒をも酌べし。先宋江を倒し、拖之人を殺し、草房の扉に入れて、登の上を載置。又主人の下官をも、同く拖入て、登の上を載せ。かの包袱蘊をぬき、是を開き。都く皆金銀。彼漢子打嘆て云く。我多年酒肆を開き、或ハ商客を害し、或ハ流人を殺し、餘多の人を

剥取し。ども。曾くかのとき流人を量り、これら罪人。ゆんぞ若干の金銀を携へ、城に我が福ひ望外に出ぬ。昨夜燈花の報あり。今朝喜鵲の噪あり。果し此客来りぬ。こそ其験なり。とて再び包袱を蘊で、門前を走り出せ。家僕らが回り来り、後待。まびく。嶺の上を望んで居られども、只一人の家僕も回らざりし。而も三人の漢子来り、嶺を望み、上りて。彼酒店の主誰あるや。忙しく。此を。に。原藏も人あり。白多。乃ちお迎へ。云く。長兄ら。何。此の處に遊移し。かの三人の内、一人の大漢子先答て云。我が輩ハ嶺上を登り、一個の人を相迎ふ。頃日ハ。此辺に。時節ゆ。毎日此辺に待つ。と。其。あ。何。遅滞。め。一向嶺上を伺ひ望み。れば。彼酒店の大漢子又問て。をく。

長兄らの待りの人ハ原雅也也。彼大漢子ガ云我輩ガ待人ハ名之曰
 大丈夫之酒店の大漢子ガ云吾名もまた大丈夫也。又長雅ガ名も也。
 彼大漢子ガ云定く足下も及びつらん。世間の人皆山東の及時雨
 宋公明と稱之。鄆城縣の押司宋江之酒店の漢子又問く云吾宋
 公明ハ何也。名此嶺をさる也。彼大漢子ガ云我ももや。是を知らざり
 しか。頃日一人の朋友濟州より回りて。則語く云鄆城縣の押司
 宋公明何ホの罪を犯し。知らざれば。濟州府の決断に依り
 近く江州に流さる。告り由多。我熟く是を料り。想ふ。若江州に
 趣くを必定此辺をさるべし。彼宋江鄆城縣に居あり。時どあり
 我何と彼を訪く。相見んと欲し。今幸此辺を過り
 る。我何ぞ是を迎く。相見んと欲し。んや。此也。多。我毎日此辺に

物々待り。未だも来る。今日ハ此兩人の兄弟と共嶺上
 登く。お待んと欲し。直めらふ。且汝ガ商賣頃日ハ得米も也。
 酒店の大漢子ガ云某此教月。好き得米も。遇は。寂實。いふ
 今日天より偶幸ひを賜り。三人の男子を捉へ。包袱の内大
 突る。想を大利を。彼大漢子。是を。忙ハ。問て云
 汝の捉へ。男子ハ。模様風俗也。酒店の漢子ガ云。お人
 監押の下官一人ハ流罪人。彼漢子大。孩。流罪人。身材矮
 しく。面色黒。酒店の漢子ガ。長兄の云。い。とく。
 彼流人身の文極。矮く。面色。彼漢子。慌て。忙。問
 何ぞ。汝未だ。殺。酒店の漢子ガ云。我早速。殺
 さんと。思。祈。家僕。回。依。尚草房の内

入置ぬ彼大漢子ガ云我等罪人を弑す一見せん。汝導けと。四人
竟ノ草房の内ハ入るこゝをさうらふ危く殺。宋江ハ今もや殺さんと
こゝへ登の上ハ裁置たり。彼大漢子も亦のまゝ宋江ハ對面せざり
バ。分明ハこゝを職認と能う。只顧躊躇と決せざり。が
忽想ひ寄るる。あ人の下官ハ包袱蘊の内ハ必定公文あり。此
公文をさうらふ立地ハこゝを知る。乃酒肆の漢子ハ對して云
る。我未だ宋押司ハ遇ざり。今此流人をさうらふと。分明ハ是を
あ。唯此下官ハ包袱づ。此内の公文をさうらふ。彼流人ハ姓名
明らふ不知る。酒店の漢子ハ云長兄の言尤然りと。頃々下官
ハが包袱蘊を開き内をさうらふ。一錠の大銀。兼ハ若干の碎銀あり。
彼大漢子先文書を取。これを披讀し。四人齊く大ハ歎とて云。

危急なる。宋押司己ハ非命の死をさうらふと。あひゆる。今不
命を脱れらん。是天の祐。彼大漢子又云我己ハ四五日此辺に出
此押司を迎へ。昨日追ハ嶺下に在て待。今日不思淺ハ嶺
上ハ登り押司の命を救ふ。我平生押司を慕ふの誠天に感通
し。疑ひハ速ハ解茶を用く。宋押司を甦生とせ。進
ま。未だ云も了ら。酒肆の漢子傾て解茶を把て宋江ガ
口ハ灌ぎ入る。宋江漸甦。身を動。乃ち眼を開く。左右を
見。四人の漢子双方ハ双ハ立ぬ。宋江ハ原来ハ何を職認。維
なる。あと思ひる。処ハ彼大漢子先宋江ハ向く。懇懇ハ拜を
なれ。宋江ハ呆。足下ハ誰人。我を救。疑。是
夢中。又彼酒店の漢子も同トく身を翻。宋江を

拜ししれ。宋江も又お人の男小礼を還し。足下お人の実小雅おれば。某を珍愛敬し。ものや。願くハ高姓大名をばん彼大漢子答て云某ハ姓ハ李名ハ俊と号ハ原廬州の者中し。揚子江の内小在て船を擲ハ水主ハ某別し。能水性を識。故人皆某小倅名ハ混江龍李俊と称。又彼酒店の主ハ乃ち此揭陽嶺の人中。酒の内小麻菜を入の商賣をあら。このゆゑ小人皆彼を称し。催命判官李立と。又彼二人の者ハ同胞の兄弟中し。乃ち尉陽江の辺此者ハ此ハ官司の法度を背く。私小塩を此処小運び来。これを商賣ゆ。乃ち某が家小倚。身を安せしむ。彼お人原江辺小住し。能水小伏し。善船小駕。も兄が名を出洞蛟童威と号し。弟が名成翻江童猛と号し。願くハ押司彼小拜。受多くと未と云。

罷らざる。兄才の者忙しく。地上小伏し。拜をあら。宋江が云既小今麻菜を用ひ。某を死えと。いひ。又某が名を知。形憐を垂。李俊が云某一人の朋友頃日濟州より回。某小語り。宋押司事を做。江州小流。れ。告。某の。押司の。顔を拜せ。常。何。鄆城縣。弛。押司を訪。配所へ。趣。き。定。此。辺。を。推。察。凡。五。七。日。嶺下小。押司を待。曾て消息も。今日想。天。引。合。せ。と。彼。お。人。の。兄。才。と。嶺。上。幸。小。立。小。遇。て。押。司。の。顔。を。疑。ひ。此。処。小。押。司。の。顔。を。見。某。素。より

あへし 押司を職認ごりしゆ。ゆゑ分明に知ごく只顧躊躇ふ及びしに不図
の彼文書あへんとを思ひ出し則文書を改え果して押司の姓名は
我が輩忽然として半ハ悦び半ハ孩然忙しく解業をみて押司の只
伏ぎ納し。漸々甦せ進らせぬ只知らば何ホのうりぞ江州に流れ
させぬの願くハ詳ふこれと知せぬ宋江をゆきて大ハ悦び彼閻婆
惜を殺せしと石勇小遇そ弟宗清が書簡をゆき家小甲り今ま
江州に流さるる次才一々委しく培りたれば。四人の者感歎止ざりしを
船来の舟小宋清のしを四郎と書り。もと宋太公の四男なり。美之文論若
云趙氏の都頭宋江と捕へんぬ。そ席小餐を賄賂を請刺一宿
せハ捕盗や珍客や分別しむる互ハ悠長ある次才し

新編水滸画傳卷之三拾三畢

